

尾島茂樹の恋愛論序説

目 次

| | |
|----------------|---|
| 尾島茂樹の恋愛論序説 | 1 |
| 続・尾島茂樹の恋愛論序説 | 4 |
| 続・続・尾島茂樹の恋愛論序説 | 7 |

本小冊子は、名古屋大学大学院法学研究科
助手院生会において発行されていた機関誌
『掲載るんです』1号～3号の原稿を再版
したものです。

尾島茂樹の恋愛論序説

本稿はジョークであり、登場する人物（本稿の著者を含む）、団体等は実在のものとは原則として何ら関係ありません！！また、論理性、整合性、結論等について真剣に考えないように。頭がウニになること請け合いです。

1. はじめに

近年、「恋愛」「愛」等についての論稿 [1] が多く出版されるようになり、ベストセラーとなっている。それぞれに著者の経験、問題意識、方法論を踏まえ、教えられるところもある。しかしながら、これらの論稿には学術的な意味での厳密性が欠けていたように思われる。そこで、本稿では、以下に恋愛論では欠かせないと思われる「恋愛」および「デート」という2つの用語について検討を加え、今後の議論の一助としたいと思う。

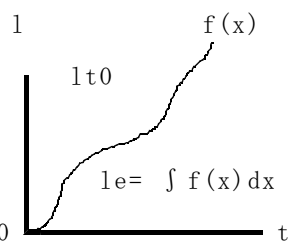
2. 「恋愛」について

民刑事学科の某助手は、私がこの論稿の依頼を受け「恋愛」について書くことになったと聞いたとき、私には恋愛経験がないのに（このようなテーマの論稿が書けるのだろうか）という趣旨の発言をした。確かに私が現在「ねるとん紅鯨団」 [2] に出場するとすれば、「彼女いない歴」は28年5カ月とせざるを得ないであろう [3]。「恋愛」が「異性と1対1で『交際』する」という意味であるとすれば、「恋愛」経験はないということにもなろう。しかし、そのように狭く解する必要があるのであろうか。「恋愛」が語られるとき、しばしばその過程が楽しいと言われる。すなわち、自己が好ましいと思っている者が自己についていかなる見解を有するのか、まずそれが知りたいと思うことになる。確かにいかに思われているのか解らないから苦しく辛い、しかしそれが楽しいのだといわれる。こう考えるならば、一方的に思っている、憧れている、なんとなくいいと思っているというような範疇に該当する場合でも、十分「恋愛」と呼べるのである。

以上の考察から、「彼氏（彼女）いない歴」が年齢に等しい人間についても「恋愛」という事象が規定できることが実証された。ここでは、「恋愛」が「交際」という概念にとられず、当該人の心の持ち方一つで決まるということが前提されている。ここで、恋愛の対象は1つである必要はなく、同時に複数の対象 [4] に「恋愛」することも含まれ、そのような場合には感情が互いに相乗効果により高まる？場合もあろうし、相殺されることもあろう。したがって、その心の持ち方を「恋愛度」と呼ぶとすれば、基点となるある時点に、ある人はある一定の「恋愛度」を有することになり、その人の「恋愛経験」は、それまでの恋愛度の積み重ねであることになる。以上の関係は簡単に次のように示される。

ある人の時間 t_0 における恋愛度を l_{t_0} とし、当該人の過去の恋愛度の変化 l が関数 $f(x)$ で表されるとすれば、当該人の恋愛経験 l_e は $f(x)$ を 0 から現在まで積分した式によって表される。

そこで次にこの「恋愛経験」が当該人間のその後の恋愛行動にいかん影響を及ぼすものか。ある時、自己が好ましいと思ってい



る相手方に一定のアプローチを試み、不成功に終わったとしよう。このことは恋愛経験の中で「不成功事例」としてインプットされ、その後のアプローチの方法に負の影響を及ぼす。他方、アプローチが成功した場合には、「成功事例」として正の影響を及ぼす。これらのことは否定できない。しかし前回成功した方法が次回に必ずしも成功するとは限らず、不成功に終わることも多い。成功・不成功は人間の個性に大きく依存している。第1に、性格の問題がある。『すてきな片想い』[5]の中で潮崎[6]が述べているように、相手のいわゆる「熱意」にほだされるタイプと自分の好きなタイプ以外うけつけないタイプが存在する。前者には成功しても後者には不成功という場合は多数想定できよう。第2に当人間の前提関係の問題がある。極端な場合、ある女性がある男性から一定のアクション[7]を受けたとき、相手のことを好ましいと思っていれば「うれしい」と感じ、相手のことを嫌いであれば、たとえ全く同じ状況で全く同じアクションを受けたとしても、単なるセクシャルハラスメントと感じるにすぎなくなってしまう。第3にタイミングの問題がある。同じアプローチをするのにもTPOを無視して行動すれば、成功するものも不成功に終わってしまう。このようにみえてくると「恋愛」なるものは非常に個性の強いものであり、「恋愛経験」はその後の恋愛行動について全く役立たないとはいえないが、マニュアル的に役立つものでもなく、決定的な要素とはなっていないといえよう。

3. 「デート」について

再び登場の民刑事学科の某助手がある時私に「何回デートをしたことがあるか」という質問をした。基本的に初を装っている私は自慢げに「自慢じゃないがしたことがない」と答えたが、周りの多くの人の「こいつは嘘つきだ」という批判に答え、返す刀で「それは『デート』の定義が確定されなければ決められる問題ではない」と反論した[8]。これが「デート」の定義問題に関する発端である。

現在まで、「デート」とは何かという問題につき大きく分けて「客観説」「主観説」及び「折衷説」が唱えられ、それぞれについて細かい点に微妙な相違がある多数の説がある。ここでは、それぞれの代表的な考え方につき紹介し、検討してみよう。

(1)客観説—一定の要件を掲げこれを満たす場合に「デート」だとする説。

要件として考えられているものは、たとえば、「(親類関係にない)男女が1対1で」、「特別の行動をすること」であり、特別の行動として、「映画等鑑賞」「ドライブ」「散歩」「飲酒」「食事[9]」「喫茶」「(テニス、スキー等の)スポーツ」等[10]を例示的に掲げている。

(2)主観説—内心の意思に重点をおき、行動をした本人が「デート」だと認識し、かつ認容した場合に「デート」が成立するとする説。

この考え方には、たとえば当事者が2人の場合には、一方の認識認容で足りるとする「一方的主観説」と双方の認識認容が必要であるとする「双方的主観説」が対立している。

(3)折衷説—「客観説」の唱える要件があるか、または主観説の唱える要件がある場合

にどちらとも「デート」であるとする説。

理論上は、主観説内の対立に対応して、2説考えられるが、折衷説の論者は「双方的主観説」を念頭においている。

(4)私見

ここで我々はどの立場に与すべきであろうか。第1に「客観説」の掲げる要件は一見画一的であり、他方曖昧に過ぎる嫌いがある。したがって、一定の用語を定義付けるための限界としては不適當であろう。同じ批判が「折衷説」にも妥当する[11]。第2に「双方的主観説」は双方の意思により一定の事象が「デート」であるか否か画一的に定まる点は優れているといわなければならないが、相手方の意思を確認するまでは、発話者が自己のしたことが「デート」であるのか否か不明確になるという致命的な欠陥がある。他方、「一方的主観説」には、1つの事象がある人から見て「デート」となり、他の人から見て「デート」ではないという場合が存在する。しかし、この点は問題ではないと思われる。「デート」が問題にされるのは、「今からデート」「昨日彼とデート」「今日のデートは7時に日産ギャラリー」等必ず発話者が存在する。発話者が「デート」について発言するとき、「デート」であるか否かが確定されればよいのである。「双方的主観説」が妥当。

4. おわりに

以上、紙幅の関係で簡単にしか行えなかったが、恋愛論の中心的概念である「恋愛」及び「デート」について一定の考察を試みた。論旨、結論について「紙の無駄」「インクの無駄」「助研会費の無駄」等数々の批判が想起しうるが、「恋愛」は人類にとっても永遠の重要課題であり、批判への答えも含めて、今後も検討をすすめていきたいと思う。

注

[1] 柴門ふみ『恋愛論』、二谷由里恵『愛される理由』等参照。

[2] フジ系でやっているいわゆる集団おみあいの番組。司会＝とんねるず。

[3] 私は1962年8月生まれである。逆に26年くらいだと恐ろしい？ことになるが。

[4] 異性に限るか否かについては激論がある。

[5] 昨年(1990年)の10月から年末にかけてフジ系で放映された。主演は中山美穂と柳葉敏郎。

[6] 役＝石黒賢。

[7] 内容は読者の想像力に期待。

[8] 田中英夫『判例による法形成』法協94巻6号757頁は、判例が法源かという問につき、それは「法源」という言葉の定義によって定まる旨を示す。

[9] 但し、生協で昼ご飯を2人で一緒に食べても「デート」ではないとするものがほとんどである。

[10] 「助研会禁止用語」の関係で掲載不能のものがある。

[11] なお、「客観説」が男女関係にこだわる点を批判するものもある。この批判には「同性の間でも『デート』したい人々」からの支持がある。(1991. 1. 14)

1. はじめに

私は、以前、「尾島茂樹の恋愛論序説」と題する論稿（以下、「前稿」と略す）の中で、恋愛論における「恋愛」及び「デート」の概念について検討したことがある [1]。そこで私はその2つの概念について一応の結論を示し、学界の批判を期待したが、期待に違わず多数の批判があった [2]。そこで、それらの批判に対する反批判の機会として本稿の掲載を本誌編集部にお願いしたところ、投稿原稿の不足から本稿の掲載が快諾されたので、以下に前稿に対する批判を検討するとともに、私の考えを述べてみたい [3]。

2. 「彼女いない歴」があやしい！？ [4]

私は、前稿の中で、私の「彼女いない歴」が年齢に等しい旨を述べたが、それに対し、「彼女」についても「デート」と同様に主観説を採るのであれば、私のそれはあやしいという批判があった。前稿では、直接の検討課題とはされなかったため「彼女」を定義せずに用いたが、批判のとおり、私は「彼女」あるいは「彼」については主観説を妥当と考えている。ただし、「デート」については一方的主観説を妥当としたが、「彼（女）」については、双方的主観説が妥当と考える。すなわち、「デート」については、3当事者以上のものも許され、かつ一方的な意思で足りるとしたが、「彼（女）」に通常3当事者以上のものは考えられず、さらに、「彼（女）」になることは、2当事者間における相対的な身分上の地位の変動を伴うので、地位の変動の原因となる当事者の意思の合致が必要だからである。敷衍していえば、「彼になる」「彼女になる」という2当事者の意思の合致があってはじめて「彼（女）」になるのであり、一方的に誤解しているのは、単なる錯覚だといえる。ただし、通常の場合は当事者において意思が明示的に確認されることはまれであり、「彼（女）」の成立について要求される意思は黙示のもので足りるとすべきである。当然、私の「彼女いない歴」は双方的主観説に基づいて算定した。

3. 恋愛はやっぱり「交際」じゃなくっちゃ！！ [5]

私が行った恋愛の定義に関し、恋愛はやはり「交際」と同様に考えるべきだという批判があった。しかし、「恋愛論」が問題となるときに、恋愛を「交際」に限定して考える必要のないことは、前稿で強調したところであり、批判は妥当性を欠くというべきである。恋愛論はあくまで恋愛論なのであって、「交際論」ではないのである。

4. 恋愛対象が複数の場合にも、恋愛度を時間の関数で表すのは可能か？ [6]

前稿で私は、一定時間の恋愛度を測定する場合に、対象が複数である場合にも一定数値で表されることを前提として検討した。現在も、その前提は揺るがせられないと考えてい

るが、確かに、同時に有する、複数人に対する「心の持ち方」が互いにどのように影響し合うのかについては、不明確のままであった。私は、前稿で示したように、それらが相乗効果をもってもよいし、相殺されてもよいと考えるのだが、それらが異質のもので、互いに独立したものとして検討した方がよい場合もあるかもしれない。結論的には前稿の結論で正しいと思うが、仮に別の方法があげられるとすれば、以下のような方法が考えられよう。

n 番目の恋愛対象に対する恋愛度を l_n とすれば、1 番目の恋愛から n 番目までの恋愛までの恋愛経験 l_e は

$$\sum_{r=1}^n l_r$$

で表すことができる。

5. 相手の気持ち次第で「デート」したことになっちゃうの！？ [7]

「デート」の定義について一方的主観説を採用すれば、自分は「デート」したつもりはないのに、相手の気持ち一つで「デート」したことになり、さらに、「〇〇さんとデートした」と相手にいいふらされたらたまらない、という批判があった（というより本人は怒っていた）。仮に、昼食を生協で二人で食べて [8]、自分はそう思っていないにもかかわらず相手がそれをデートだといっているのであれば、それは彼（女）にとってはあくまで「デート」であり、仕方がないのである。したがって、かわいそうな奴だと思って許し、そういわれるのが嫌ならば、それ以後は生協でさえも 2 人でご飯を食べないように気を付けることになろう [9]。2 度と口をきかないという方法もある。しかし、それが彼（女）にとって「デート」であるならば、あくまでそれは「デート」である。反対に、自分は「デート」などした覚えはないと公言すれば、それまでである。自分にとってはそれは「デート」ではないのである。

なお、誤解のないように付け加えれば、私は、「デート」の概念を広くするために一方的主観説を採用したのではなく、狭く限定するために採用したのである。たとえば、男女が 2 人で、一緒に映画をみて、一緒に花火に行って、一緒に夕食を食べても、「デート」ではないと考えている人にとっては「デート」ではないとすべきだと考えているのである。これにより他人からの無遠慮な中傷 [10] をかわすことができよう。

6. 主観説において当事者が認識すべき「デート」とは何か？ [11]

この批判は、主観説において当事者が「デート」だと認識するとき、その前提となる「デート」とは何かを問題とする。すなわち、当事者が認識すべき「デート」という概念

があらかじめ客観的に決っていなければ、「デート」を認識しようがないというのである。しかしながら、この批判は、「デート」の定義に関する問題の所在を誤解したもので失当であるといわざるを得ない。すなわち、主に前稿で問題としたのは、ある行為が「デート」に当たるか否かを行為の後に決定することであり、あらかじめ何が「デート」であるかを決定しようというものではなく、加えて、何を「デート」と評価するかについては、各当事者でそれぞれあらかじめ自分の考え方を有しており、それに照らして判断されれば足りるといえよう。したがって、「デート」の概念があらかじめ客観的に決まっていなくとも「デート」だと認識することは可能である。

7. おわりに

今回も全く実益のない議論に終始してしまった。今後とも、実益のない批判に対しても、まじめに反論して行きたいと思うが、今回も、前回同様、論旨の整合性、論理性、結論の妥当性等については、健康のため深く考えない方がよいと思われる。

注

[1] 尾島茂樹「尾島茂樹の恋愛論序説」掲載るんです。創刊号5頁以下（1991年）。

[2] ただし、これらの批判は体系的になされたものではなく、断片的になされたものを私が整理した。

[3] なお、筆者の個人的な事情と都合から恋愛論についてなかなか「本論」に入れないので、今回はとりあえず「序説」のままとさせて頂いた。今後、「本論」を書けるよう努力するつもりであるが、次回の論題としては、今のところ「続・続・尾島茂樹の恋愛論序説」を予定している。

[4] 某女からの批判。

[5] 某男からの批判。

[6] 某男の疑問。

[7] 某女の怒り。なお、この某女は今回の「掲載るんです。」に投稿する予定であったが、彼女の脱稿が遅れたため本稿の掲載が許されることとなったという話を聞いた。記して感謝の意を表したい。

[8] 客観説においてもこの場合は「デート」ではないとするものがほとんどである（尾島茂樹・前掲注（1）7頁注9参照）。

[9] ただし、5人だろうが、10人だろうが、「デート」になる可能性はある。

[10] たとえば、前述のような、デートしたつもりがないのに、デートしたといわれるようなこと。

[11] 某男の批判。

(1991.6.23)

1. はじめに

「続・尾島茂樹の恋愛論序説」 [1] (以下、「前稿」と略す) に対しては、「尾島茂樹の恋愛論序説」 [2] 程の反響はなかったが、一部において、次節に述べるような疑問が呈せられた。はっきりいって、本稿のような極めて実益のない議論を延々と連載するのは著者としても忍びなく、読者としても、2回までなら許せるが、3度となると堪忍袋の緒が切れるかもしれない。しかしながら、なにぶん前稿において約束したことでもあるので [3]、この場を借りて検討してみたいと思う。

2. 「彼」「彼女」の定義に関する意思の不一致について

私は、前稿で、「彼」「彼女」の定義は「双方的主観説」に従うべきことを述べた [4]。それに対して、某男から、不一致の場合の処理についての疑問がよせられた。すなわち、意思が一致している場合はよいとして、意思が一致していない場合、たとえば、男性の方は相手の女性を自分の「彼女」だと思っているが、女性の方は相手の男性を「単なる友だち」としか思っていない場合、「双方的主観説」によれば、当事者は、「彼」「彼女」と呼べないことは当然だが、それでは、当事者間の関係はどのように考えればよいのか、というのである。その某男は、本人の答えとして、低い方の意思が優先するという考え方を示している。より厳密ないい方をすれば、当事者の意思の重なりあう範囲で意思の合致があったものとして考え、その範囲で当事者間の関係を認めるというのである (図-1、2 参照)。すなわち、先にあげた事例の場合には、当事者間の関係は「単なる友だち」の関係として処理することになると主張しているのである。

私も、先の事例のような場合には、それでよい場合もあると思うが、このような考え方が到底妥当しないような場合があると考えるので、もう少し検討を加えることにしたい。

図-1 感情の推移 (A)

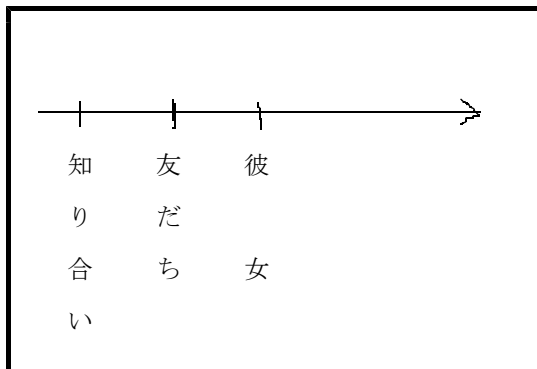
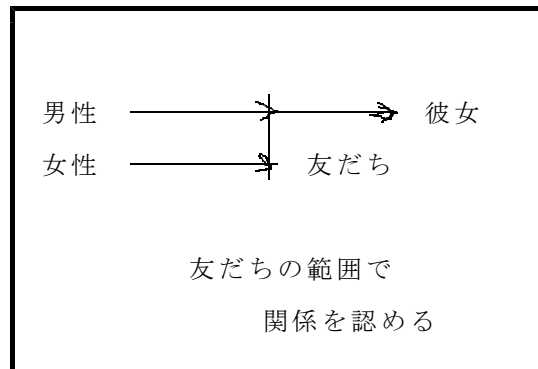


図-2 当事者の関係

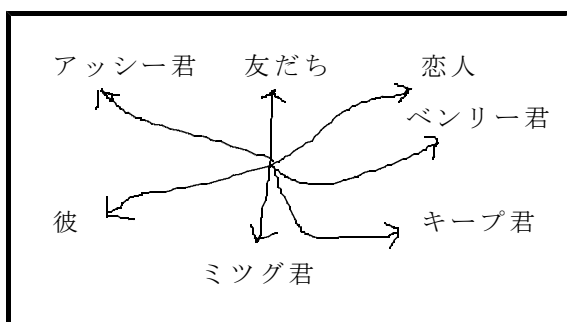


たとえば、男性が相手の女性を自分の「彼女」だと考えており、女性は相手の男性を「アッシー君」だと考えているとしよう。すなわち、女性は、相手の男性が「自分に惚れている」ことを当然の前提として認識・認容した上で、相手の男性を、六本木で遊んで

[5] 夜11時だろうが、12時だろうが、電話1本で迎えに来て、家まで送ってくれ、1回くらい一緒にお茶を飲んでやれば、その他には何も対価を要求しないただの男としか思っていない場合はどうだろうか [6]。「双方的主観説」によれば、「彼」「彼女」とは認めることはできないであろう。そこで、先の某男の考え方によれば、小さい範囲で意思の合致を認め、「男性は女性のアッシー君である」という結論になるが、はたして妥当であろうか。すなわち、ここでの私の疑問は、「小さい範囲」とはどういうことか、さらには、「自分の彼女」という意思の中に「彼女のアッシー君になる」という意思が一般的に包含されていると考えてもよいのか否かである。もちろん、男性が、彼女は「自分の彼女」だが、自分は「アッシー君」でもかまわないという認容の意思を有していれば、そこで意思の合致があるのであり、当事者の関係を「アッシー君関係」と考えることもできよう。しかし、「アッシー君」の多くの場合、女性が、当該男性以外に多くの「アッシー君」を抱えていることを「アッシー君たち」に秘密にしていることが多く、男性は、多くの場合、「自分一人の彼女」だと考え、そうだからこそ、夜迎えにきたりしているのである [7]。そのような場合には、自分がただの「アッシー君」ならば、そして、自分と同様に地位にいる男性が多数存在することがわかれば、そのような行動はしないという意思をもっている場合がほとんどといえるのではなかろうか。この場合にまで、意思の重なりあう範囲でということ、で、「アッシー君関係」を当事者間に認めるのは無理があるのではないかと思うのである。すなわち、「自分の彼女」という意思と「彼女のアッシー君」という意思は次元が違うものであり、大小、強弱を比べることはできず、包含関係にもないといわなければならない (図-3 参照)。

以上の考察から明らかになったことは、「包含関係」という概念を用い、安易に概念を比較対照できることを前提として比較対照し、当事者の意思にないものを当事者間の関係として認めることは、妥当ではないということである。

図-3 感情の推移 (B)



それでは、このような場合には、どのような処理が可能であろうか。私は、このような場合に、当事者の意思から当事者間の関係を画一的に1つのもとして確定するのは不可能であるとする。したがって、上に述べた事例では、彼女は彼を「アッシー君」だと思っており、彼は彼女を「彼女」だと思っているとしかいいようがない。そして、それ以上でも、それ以下でもないのである。だから、彼女が他人から「彼は誰？」と聞かれれば、「あれ．．．あれは私のアッシー君よ」と答えるだろうし、彼が他人から「彼女誰だよ？」と聞かれれば、「俺の彼女さ」と答えるだろう。これは、これでしかたがなく、民法95条の適用もないのである。

3. おわりに

今回も、前々回、前回同様、机上の理論に終止した観は否めない。しかも、今回は、問題の提起に対して、きちんとした答えすら用意することができなかった。他方、「恋愛論序説」もすでに、3回目を数え、恋愛に関する基礎的な考察として、着実に恋愛の発展に寄与しているといえよう。そこで、「序説」は今回で終了することとし、次回からは新シリーズでお届けすることにしたい。

注

[1] 載せるんです。2号12頁以下（1991年）。

[2] 載せるんです。創刊号5頁以下（1991年）。

[3] 14頁注（3）参照。

[4] 12頁参照。

[5] 「栄」「名駅」とすると、名古屋では話がリアルになるので。

[6] しばらく前に、テレビでこのような男女を取材した番組をやっていた。

[7] ちなみに、先に述べたテレビ番組では、案の定、女性はそのような男性を「ただのアッシー君」だといっていたが、夜、電話で呼び出された男性の方は、「彼女とつきあっているんです。僕の彼女です」とレポーターに答えていた。ちなみに、その女性は、手帳の住所録をレポーターに見せ、男性がたまたま用事で来れない場合、たまたまいない場合に備えて、そのような「アッシー君たち」を十数人もっていることを示していたのである。男の悲哀を感じる。

(1991.9.24)

広告

「尾島茂樹の恋愛論序説」に続く第2段！！「尾島茂樹の恋愛論」執筆快調！！
序説を書き続けたあの尾島茂樹が、今、明らかにする恋愛論の本論！こう、ご期待